

TOKYO!

2008(平成20)年7月22日鑑賞(東映試写室)



第1話『TOKYO！〈インテリア・デザイン〉』★★★★★ 監督・脚本＝ミシェル・ゴンドリー／出演＝藤谷文子／加瀬亮／伊藤歩／大森南朋／妻夫木聡／でんでん／第2話『TOKYO！〈メルド〉』★★★★★ 監督・脚本＝レオス・カラックス／出演＝ドゥニ・ラヴァン／ジャン＝フランソワ・バルメール／石橋蓮司／北見敏之／嶋田久作／第3話『TOKYO！〈シェイキング東京〉』★★★★★ 監督・脚本＝ボン・ジュノ／出演＝香川照之／蒼井優／竹中直人／荒川良々／山本浩司／松重豊 (ビターズ・エンド配給／2008年フランス、日本、韓国合作映画／110分)

……全18話の『パリ、ジュテーム』(06年)もよかったが、TOKYOをテーマとした全3話のオムニバスも上出来。3人の巨匠による独創的な視点を楽しみながら、パリに負けない「TOKYO」を満喫しよう！さて、あなたのお好みにマッチするのはどれ……？

—全体編—



「パリ」は18人、「TOKYO」は3人だが……

私は本来オムニバス映画は嫌いだが、国際色豊かなオムニバス映画は何かと興味深い。そして、各5分、全18話でパリの魅力を描く『パリ、ジュテーム』(06年)には全世界から18人の監督が集結し、日本からは諏訪敦彦監督(第8話)が参加した(『シネマルーム13』419頁参照)。

それに対して、プレスシートで「かつては異国趣味の対象としか捉えていなかった“東京”が近年、近未来の集合体“TOKYO”として世界の人々を惹きつけている」と表現された「TOKYO」をキーワードとしたこのオムニバス映画には、フランスからミシェル・ゴンドリー監督とレオス・カラックス監督が、韓国からはボン・ジュノ監督が参加した。もちろん、勝負は数だけではなく質。そして、プレスシートによると、「MANGA」は、パリの大きな書店のフロアで大きな場所を占領し、ニューヨークでは“ZEN”をテーマにレストランもインテリアショップも大盛況である。“OTAKU”は世界のアートのキーワードとなっている。“TOKYO”は文化の最先端

を進む憧れの街なのだ」とのことだが、それって本当……？ それとも誇大広告……？ そんな心配をしながら鑑賞したが、その出来はワンドラマ！ すばらしい企画に大拍手した『パリ、ジュテーム』の採点は全体として星5つだったが、星が5 + 5 + 4の『TOKYO!』の出来も上々。私はそう確信し、パリに負けない「TOKYO」に自信を……。

—第1話『TOKYO！〈インテリア・デザイン〉』—

独創性はフランス人が1番……？

ジャン＝リュック・ゴダールやフランソワ・トリュフォー、そしてヌーベルバーグやカンヌ国際映画祭、ちょっと単語を並べただけでも、十分にフランス映画の独創性をイメージすることができる。やはり、独創性はフランス人が1番……？

それは、TOKYOをテーマとした第1話ミシェル・ Gondrier監督の『TOKYO! 〈インテリア・デザイン〉』においても顕著。だって、駆け出しの映画監督アキラ（加瀬亮）と一緒に東京に出てきた恋人ヒロコ（藤谷文子）が、ストーリー展開の中、なぜかイスに変身してしまうのだから。カフカが1915年に発表した小説『変身』は、主人公がある朝目覚めると虫になっている自分に気づいたという奇妙な書き出しから始まるものだが、それにはある必然性があった。そうすると、さてヒロコがイスに変身するに至った必然性とは……？ それが、第1話の（哲学的な？）テーマだが、ミシェル・Gondrier監督はそれを説得力をもって表現！

TOKYOでの居場所は？

人間は本来1人では生きていけない動物だから、恋人や友人、同僚、家族などの人的な繋がりが必要。そんな人間関係の中で、自分の最も心地よい居場所を見つけることができれば安泰だが、TOKYOではなかなかそれが見つからないから大変。

映画の冒頭、アキラとヒロコの仲良しぶりを見ていると、この2人は故郷の田舎で生活すれば、それなりの心地よい人間関係の中で2人の居場所を見つけることができたのだろうが、大都会 TOKYOに出てくると話は別。TOKYOで一人暮らしをしているヒロコと同級生アケミ（伊藤歩）の部屋に2人して転がり込んだのはいいが、それはアパートを見つけるまでの2、3日せいぜい1週間が限度。それを過ぎれば、ヒロ

コとアケミの親友関係にヒビが入るのは見えているが、想定外のさまざまなトラブルに巻き込まれる中、遂に滞在が1週間を超えたから大変。また、何ゴトにも器用なアキラはTOKYOでのアルバイトにも順応できたが、「志が低い」とアキラからもアケミからも批判された(?)ヒロコは、バイトでも採用してもらえない始末。そのうえ、恋人のタケシ(妻夫木聡)とうまくやっているらしいアケミは、アキラともすぐに仲良しに。これでは、自分の居場所は一体どこに……?

そんな風に思い悩んでいると、ヒロコはある日心臓に穴が開き、歩いている足が棒になり、そしていつの間にか、全身がアイスに……。

はじめて知った女優、藤谷文子に注目!

『カーテンコール』(04年)、『シネマルーム7』296頁参照)をはじめとして私がよく知っている女優伊藤歩を差し置いて(?), ミシェル・ゴンドリー監督が主役に起用したのが藤谷文子だが、彼女は私とその名前も顔も全然知らなかった女優。プレスシートを読むと、彼女はアメリカ留学中に執筆した小説『逃避夢』が映画化されて自ら主演をつとめたり、国際的に活躍したり、近年の出演も相次いでいるらしい。彼女は13歳の時にCM『リハウス娘』に出演したとのことだが、それほどの美少女とは思えず、どちらかというと個性派……?

ミシェル・ゴンドリー監督の起用に因って、彼女は、TOKYOで次第に混迷の度を深め、遂にアイスに変身してしまうという悲劇のヒロイン、ヒロコ役を演じ、オールヌード姿まで披露してくれる。そんな藤谷文子に注目!

ちなみに、あなたは彼女の父親は誰か知ってる……? それは何と、『沈黙』シリーズで有名な大俳優スティーヴン・セガール。私も全然知らなかったのだが、指摘を受けて調べてみてビックリ! 合気道が特技の1つとはさすがセガールの娘だが、体型だけはオヤジのようにならず、今のまますをキープしてほしいもの……。

—第2話『TOKYO! 〈メルド〉』—

怪獣ギララ以上に恐い怪人メルド!

7月26日に公開される『ギララの逆襲 洞爺湖サミット危機一発』(08年)は風刺タップリの面白い映画だったが、第2話には怪人メルドが登場する。メルドは一文字

菊という花びらと紙幣を主食とし、下水道で生活しているが、時々マンホールから東京の市街地に現れて闊歩し、悪さの限りを尽くしたから東京は大パニックに。

このメルドに扮するフランス人俳優ドゥニ・ラヴァンは、レオス・カラックス監督作品に16年ぶりに主演したとのことだが、レオス・カラックス監督を有名にさせた『ボーイ・ミーツ・ガール』（83年）、『汚れた血』（86年）、『ボンヌの恋人』（91年）といういわゆる“アレックス三部作”にすべて主演した旧知の仲。そんなドゥニ・ラヴァンが、レオス・カラックス監督の演出どおり、奇妙な風体で、奇妙な歩き方で、奇妙な言語を操りながら、渋谷で闊歩しながら手榴弾を投げ放つ姿は、洞爺湖サミットのさなか突如札幌に現れた怪獣ギララ以上に恐ろしい。もっとも、ギララ退治はG8の力だけではできず、タケ魔人の応援によってやっと実現したが、メルドの逮捕は警察の特殊部隊の登場によって簡単に。さあ、こんな怪人メルドでも人間である以上裁判が必要だが、マスコミ注視の中で始まった法廷は……？

法廷シーンの違和感 その1——通訳

09年5月からの裁判員制度の実施を控え問題が山積しているが、法廷通訳をどうするかもその1つ。外国人犯罪が増える中、3人の裁判官と6人の裁判員に対して、いかに正確に通訳するかという苦労は、法廷での意思疎通が日本語でも難しいことを考えれば、容易に想像できる。すると、奇妙な言語を操るメルドの法廷での通訳は誰が……？メルドの特殊言語を理解できるのは、フランスのヴォランド弁護士（ジャン＝フランソワ・バルメール）を含めて世界に3人しかいないらしい。そこでこの映画では、ヴォランド弁護士がメルドの「弁護士」に就任すると同時に、フランス語の通訳を媒介として特殊言語の通訳も兼ねることになったが、それって法律的に許されるの……？私は弁護士として、まずそんな点に違和感をもったが……。

法廷シーンの違和感 その2——検事の尋問

裁判員制度実施に向けて、今や弁護士会でも「つづり方教室」ならぬ「話し方教室」が花盛りだが、本来そんなものは学生時代に学ぶべきもの。やらないよりはやった方がマシだろうが、今さら付け焼刃的にやっても、頭の硬くなった40代、50代のおじさん、おばさんの弁護士の尋問技術やプレゼン能力が格段に上達するとは思えない。

メルドを尋問する担当検事（石橋蓮司）の質問や追及ぶりの下手さ加減を見ている

と、それを痛感！ この検事は、証人尋問（被告人質問）を何のためにやるのか全くわかっていないのでは……？ そのため、どういう質問をくり出せば効果的なのかという方法論もなく、ただ思いつまま、感情の赴くまま質問しているだけ。もっとも、そんな下手クソな尋問でも下された判決は「死刑」だったからよかった（？）が、ひょっとしてこれも、裁判が始まる前から世論的に決まっていた結論を、裁判所が判決という形でお墨付きを与えただけ……？

TOKYO の次はニューヨーク？

古くは『チョコレート』（01年）、『ライフ・オブ・デビッド・ゲイル』（03年）、『13階段』（03年）から、近時はソン・ヘソン監督の『私たちの幸せな時間』（06年）、キム・ギドク監督の『プレス』（07年）、「支え役」を世に知らしめた門井肇監督の『休暇』（08年）など、「死刑モノ」の映画は多い。また、現役の鳩山邦夫法務大臣を「死に神」と称した08年6月18日付朝日新聞（夕刊）「素粒子」の記事は物議をかもしましたが、今なお決着がつかず中途半端なまま。そんな中、死刑を宣告されたメルドの死刑執行シーンに注目！ 日本の死刑執行は絞首刑だが、弁護人のヴォランドをはじめとするたくさんの立会人の前での死刑執行という構図は、現実の制度を無視したレオス・カラックス監督の想像上の産物……？ それはともかく、死刑の執行に立ち会った医官がオーケーを出した後、メルドの身体に起こる異変を見ていると、「もし、ここで生き返ったら法律上どうなるの？」と考えざるをえない。ところが、レオス・カラックス監督の想像力をもっとウワ手で、メルドは突如透明人間のように消え去り、輪っばだけが残ったからさあ大変。そして続編の『ニューヨーク！ 〈メルド〉』を予告するかのようになり、何とメルドはニューヨークに出現！

—第3話『TOKYO！ 〈シェイキング東京〉』—

“ゆれる” は既に名作が……

プレスシートによると、ポン・ジュノ監督が『シェイキング東京』というタイトルにしたのは、地震での「揺れ」の他、気持が「揺れる」という意味を込めたもの。たしかに、この30分の短編では、11年間も引きこもり生活を続けてきた主人公の男（香川照之）が、ピザを配達してきた女の子（蒼井優）のガーターベルトが気になり、つ

い目と目を合わせたところから、地震の「揺れ」と気持の「揺れ」の両者が始まっていく。しかし、「ゆれる」をテーマにした名作は既に完成済み。すなわち、香川照之とオダギリジョーが共演した西川美和監督の『ゆれる』(06年)だ。したがって、そんなテーマを描いた『TOKYO！〈シェイキング東京〉』は、どうも『ゆれる』の2番煎じの感が……？

なぜ、引きこもりに？ 引きこもりの目的は？

「OTAKU」は世界のアートのキーワードとなっている」らしいが、すると「引きこもり」は……？ 私がよく理解できないのは、彼はなぜ11年間も引きこもり生活を続けているのか、という根本的な問題。親から毎月送られてくるカネと電話さえあれば引きこもり生活は成立する、というのが、現実問題としては病気になれば病院に行かなければならないし、賃貸借契約の更新など必要最低限他人と接触しなければならない場面があるはず。それらをすべて避け、誰とも会わず、一歩も部屋から出ないまま11年間も引きこもり生活を続けているとしたら、逆にその意思力は立派なもの。しかして、彼はなぜあえてそういう引きこもり生活を続けているの……？ それが私にはよくわからないから、この映画の説得力がイマイチ……。

少女は、なぜ引きこもりに？

再び少女に会えることを願ってピザの注文をした男の前に現れたのは竹中直人扮する店長。竹中直人は香川照之以上の性格俳優(?)だから、そこで店長が見せる破天荒な行動とセリフはあっと驚くようなものばかり。店長の話によると、少女はバイトを辞めて引きこもり生活に入り、永遠に家から出ないと言っているらしいが、それは一体なぜ……？ 引きこもりは伝染病ではないはずだが……。

決死の覚悟で、最後の手段を……

引きこもりが引きこもりに会うためには、その方法はただ1つ。つまり、男が少女を訪れるしかない。そんな決死の覚悟で最後の手段を選んだ男は、山手通り、渋谷のスクランブル交差点へと走り続けたが、なぜかTOKYOの都心部に人通りがない。しかして、引きこもり状態の少女に対して、男がとった行動とは……？ また、気持が揺れ、地震で揺れた後に訪れる結末とは……？

2008(平成20)年7月24日記